

【編集後記】

▶小森龍邦さんが、亡くなった。死が生きるものに必ず訪れると分かっている、実際にそのときを迎えると喪失感が大きかった。「小森龍邦さんを偲んで」を書かれた岡田英治さんは、高校生の時に小森さんと出会い、以降、闘いをともにされてきた。私も若い時代から薫陶を受けてきた。亡くなって存在の大きさを今更ながらに感じている。小森さんの思想、運動論の研究を本誌でも取り組みたい。▶沖和史論文は、小森龍邦さんの問題意識とともに発展させる議論であり、前号から続く力作である。旃陀羅戒をめぐる議論は難解だが、本誌には貴重である。▶青木秀男さんの論文は、ハーバード大学教授、マーク・ラムザイヤー批判である。ラムザイヤーは、被差別部落が犯罪の巣窟であるかに描いている。詳細は青木論文のとおりだが、ラムザイヤーの「業績」は、早速鳥取ループの目にとまった。彼らとの裁判は、敗訴ではないが勝訴でもなかった。控訴審では、ラムザイヤー論文の影響は不透明である。また、ラムザイヤー論文に反論を試みる研究者が極めて少ないことも危機的である。▶坂本真司さんの論文は、いわゆる第3期部落解放運動批判である。それは、被差別部落民の「差別の記憶」を部落解放の原動力とは認めない研究者たちへ向かう。被差別部落民とは、被差別の記憶を継承し共有すると考えると坂本さんの批判は的を射ている。▶山下直子さんの論文は、解放運動の男性性の指摘である。今日、インターセクショナリティの議論が注目される。この議論の中で被差別部落女性についての理論構築が求められる。▶中村葉子さんは、資本と(行政)権力の欲求によるジェントリフィケーションがもたらした釜ヶ崎の変容の本質を捉えている。「猥雑」を嫌い「うつくしい」地域・国家を夢幻する新自由主義が背景にあると言える。▶森崎賢司さんの論文は、「是正指導」以降、教育現場に押し寄せる教育内容統制と児童生徒や教職員への露骨な管理強化を具体的に明らかにしている。反撃の論理と機会創造が望まれる。▶長年差別語とメディアについて発言してきた小林健治さんの論文は、麻生太郎の野中広務氏に対する部落差別発言やBLM運動と部落解放運動との乖離を指弾する。▶川越道子さんは、ベトナム人女性技能実習生の生き抜く闘いをジェンダーの視点からクリアにした。繊維業界での低賃金労働者は、かつての被差別部落の女性と重なって見える。資本は、より安価な労働力を発見したとき、その労働力を供給してきた被差別部落を見えない存在として社会全体を再構築しているのではないかと、というのは被害意識過多だろうか。▶本誌28号から、編集の仕事を引き継いだ。前任者の青木秀男さんは、27号までを担ってこられた。そのご苦勞に気付けなかった私の感性の枯渇を自覚する。幸い、今号から三名の若い人が編集に参加している。非力な私たちは、これからも私たちに協力したいという青木さんの言葉に感謝する。(K)